

グルマーイの言葉についての瞑想

マハーシヴァラトリー

イーシャ・サーデサイ

シヴァ神は自らの名前が好き

マハーシヴァラトリーのサツァングの間、私たちはマントラ、オーム・ナマー・シヴァーヤをチャンティングしました。何度も何度も、神の名を繰り返しました。オーム・ナマー・シヴァーヤ。「私は、シヴァ神に、吉兆なる者に、あらゆるものの大いなる自己と内なる大いなる自己に頭(こうべ)を垂れる」

グルマーイは、「シヴァ神は、自らの名前が好きです。私たちが彼の名前を使って彼を呼ぶ時、とても喜びます」と私たちに説明しました。グルマーイがそう言った時、私は成長する過程で読んだ数々の物語を突然思い出しました——古代インドの壮大な物語で、その多くはもともとプラーナやその他の教典に記録されていたものです。過去のユガに、人々は遠く離れた山頂へ旅し、何カ月も、あるいは何年にもわたってタパシヤー、つまり苦行を行ったという記録が数え切れないほどありました。彼らは修行を続けながら、自らが選んだ神——多くの場合、シヴァ神——の名前を一点に集中して繰り返しました。やがて、その崇拝を喜んだ神が彼らの前に姿を現し、彼らの願い事を聞き入れ授けました。

私はこれらの物語を読むのが大好きでしたが、それでも一つの疑問がマインドの中にいつも残りました。多くの場合、それらの物語に登場する人々がシヴァ神に祈るのは、「神から何かを得たい」というのが理由のように思えたのです。時には、彼らの願いは高潔で徳のあるものでした——ダルマを守ることや、人類の向上などの願いです。またある時には、もっと身近で個人的な目的を思い浮かべていました。そしてさらには、祈る者が明らかに強欲の化身であり、自らの富や権力を蓄えることしか頭がない場合もありました。アースラ(悪魔)たちは、デーヴァター(神)

たちや地上の人々と同じように、シヴァ神の祝福を求めています。ラーヴァナは悪魔の王で、『ラーマーヤナ』の中で多くの不道徳な行いをしたことが描かれています。彼でさえ偉大なシヴァ神の信奉者であると言われていました。彼の不屈の力の多くは、シヴァ神にささげた厳しいタパシヤーの成果だったのです。

そこで私は考えました。「すべてを知り、極めて超然としている神が、どうして誰であろうと、どんな行いをしてきた者であろうと、どんな意図を持っていようと、これらすべての人に願うものを与えることがあり得るのだろうか？ それは『ただ』彼の名前を繰り返したからという理由で、『公正』なのだろうか？」

当時の私は、少なくとも知的には、神の慈悲の本質を十分には理解していませんでした。シヴァ神はダヤール、慈悲深き者です。彼はバクタヴァツアラ、信奉者に対して優しい心を持つ者です。彼はアーシュトーシュ、容易に喜ぶ者、真心から祈る者に素早く応える者です。私たちが神に呼び掛け、その名を唱える時、私たちの欠点は二の次になります。神自身が私たちに会いに来てくれます。彼は、内側の大きい自己であり、私たち自身の中にある神なのです。この神聖な存在を体験する前に、過去の過ちの一つひとつすべてを償う必要はありません。神の愛に値するために、より「改善された」自分になる必要もありません。「思い出す」だけでよいのです。神は常にここに、まさにここに、私たちと共にあり、そして裁きません。

これは、私たちは自分の行動に責任を持たなくてよい、ということではありません。人生で良いことをしようとしなくてよいわけでも、親切で、寛大で、思慮深くなるよう努めなくてもよいということでも、この惑星やその住民に心を配らなくてもよいと示唆しているわけでもありません。グルマーイは私たちに、まさにこれらを行うことは人間としての義務であると教えています。教典に語られる物語でさえ、この世界で正義が保たれるようにするために、何らかのただし書きが含まれていることが多いものです。神はアースラの願い事をかなえることがあるかもしれませんが、その悪魔が自らの悪徳——貪欲や傲慢(ごうまん)——を野放しにするならば、間違いなく滅びることになるでしょう。

要点は、神の慈悲——および私たちがその慈悲を体験する力——は、正しいとか間違っているという概念を超えた次元にあるということです。さらに教典は、神の名前には本質的に浄化の力が備わっていると説明しています。その名前を繰り返すこと自体が徳のある行為です——それは吉兆を生み出し、増大させます。『シヴァ・プラーナ』には、その章全体でシヴァ神の名前をたたえている章が幾つもあります。それらの章の一つを語る賢人スータは、「シヴァ神の名前が罪を滅ぼす力は、人間が罪を犯す能力よりも大きい」とさえ言っています。彼は、神の名前を罪を断ち切る「斧(おの)」として、罪という大火に焼かれた者を癒やす「甘露」に例え、さらには「完全なる解放」¹への手段であると説明しています。

マハーシヴァラトリーのサツァングでグルマーイは、神は自らの名前が好きで、私たちが呼び掛けると神は喜ばれる、とシンプルに言いました。私にとってこの言葉は——それ自体甘美で心引かれる言葉であり——熟考のためにとっても多くの可能性のある道筋を照らし出しました。とても多くの熟考すべきアイデア、そして、関連づけて考え、さらに深めるべき連想。

ですから、私は思うのです。もしあなたがこの教えについて熟考する機会があったなら、どんなことが思い浮かびましたか？ シヴァ神が自らの名前が好きであると聞いた時、あなたは何を考えましたか？



© 2026 SYDA Foundation®. 著作権所有。

¹ *Siva Purana: Part I*; ed. J. L. Shastri (Delhi: Motilal Banarsidass, 1950), chap. 23, p. 152.